薏苡仁或ハ西國米ヲ砂糖ニテ煮テ、石碗ニ盛出ス、水ニテ粥ノ如クニシテ、砂糖蜜カケテヨシ、此方律院點心ナドニモ用、此ニテ總終ナリ、

〔長崎紀行〕十五日〇明和四年十月菊左衞門〇長崎町名主櫻宅にて、夜食に唐樣の卓子（シツホク）といふ饌部を出す、給仕のものに指南せられて箸を取、一案に六人ヅヽ圍み坐て食す、但飯椀計り面々にて、羹菜は寄合なり、

卓子圖〇圖略

案のさしわたし貳尺四五寸

酒食ひ初ると間もなく出る大鉢、素麵、鯛、せん卵、木茸、葱、大鉢は替らず、どんぶりは皆かはる、

〔西遊記五〕卓子（とつはし）

近きころ上方にも唐めきたる事を好み弄ぶ人、卓子食といふ料りをして、一ッ器に飲食をもりて、主客數人みづからの箸をつけて、遠慮なく食する事なり、誠に隔意なく打和し、奔走給仕の煩はしき事もなく簡約にて、酒も獻酬のむづかしき事なく、各盞にひかへて心任せにのみ食ふこと、風流の宴會にて面白事なり、寺院にも黄檗宗などの寺には、不茶とて精進ながら卓子料理をすることなり、是日本にてはめづらしきことに思ひて、至て心易き朋友中ならでは行ひがたき事なるに、唐土にては世間常のことなりとぞ、それゆへに長崎に來れる唐人、日本の常々貧家といへども、膳椀みな別々にひかへて、おのれが箸にては、香の物一ッもとらざるを見て、大ニ感心し、扨も日本は禮義正しき國なり、家内のしたしき中にてさへ、日夜飲食の事にかくの如く禮をみださず、貧家といへども膳椀を別々に備へたるは、唐土などにてはおもひもよらざる事といへるとぞ、誠に是を聞ては、日本の風義正しきをよろこぶべき事なり、禮儀正しき中にて、たまたま上方の如く、卓子料理も打和してよけれども、此事常に成りてはいとみだりがはしき事なる